清少納言の感動

雨海博洋

清少納言『枕冊子』第九段（段数・引用文は田中重太郎校註『枕冊子』による。）は、

よろこび奏するこそをかしけれ。うしろをまかせて、御前の方にむかひて立てるを。拝し舞踏しさわぐよ。

といった短少段の一つである。これは一般的に、

叙任のお礼言上をするさまは面白いものだ。下襲の裾を後にひいて主上の方に向って立っているよ。また拝舞して忙しく立ちふるまうことよ。

といった意味に訳されている。一体これでは清少納言がどのような意図を持ってこの段を綴ったのかはっきりしない。そこで、この段を宮廷儀式のメモあるいは備忘的記事ではなかったかと見る向きもある。しかし誇り高き宮廷女性の作者、何の文芸意図もなしに備忘的記事をものしたものであろうか。与えられた紙数では枕冊子の跋文を細く検討する暇はないが、跋文にある枕冊子の自評は、一応謙辞によって綴られているが、その裏には例の自負心ともいうべきものがちらついており、明らかに読者を意識して書いた文芸書である。しかも、この冊子は跋文によれば、中宮の御兄内大臣伊周が、主上と中宮にそれぞれ奉った立派なものである。これを中宮から頂戴し、それに書き誌したものが単に備忘的メモであってよいものだろうか。彼女の誇り高き文才がこの貴く華麗な冊子に相当文芸的野心を燃やして立ち向ったと見てよいであろう。その点、池田亀鑑博士はこの段を「随筆行事に関するもの」（全講枕草子）として随筆の部に入れて考えている。また、早く金子元臣氏は「一体長袖長裾で翩々たる姿を、優雅と感ずるのは、古今東西の差別もないことで、心理的に当然の帰結ではある……」（枕草子評釈）と記事内容を美的観点から捉えられているのは一応賛成すべき方向に行っている。更に、これを内面的に捉えられたのが岡一男博士で、「優雅な儀礼の中に喜悦の気持の現われているところに面白さを感じているのである。」（枕草子精講）と評され、一歩前進した考えを述べられている。これらの先学のご高説を基に、いささか筆者なりの見解を述べてみたい。

「よろこび奏する」とは言うまでもなく、任官や叙位の後に参内して御礼言上する奏慶、拝賀のことで、当時の宮廷人としては最大の関心事であった。清少納言も枕冊子三段の中「八日　人のよろこびして走らする車の音、ことに聞えてをかし。」と記して、日頃耳障りな車の音も、奏慶の日は一種格別に響いて快いと言っている。そ

のように奏慶は王朝人にとってはよろこばしいのであるが、この段にいう「よろこび奏するこそをかしけれ」の「をかし」は単に奏慶そのもののよろこびを表わしたものではない。「こそをかしけれ」と強調表現されていることからも、その「をかし」を発せさせる何物かが他にあるはずである。それは「をかしけれ」に続く「うしろをまかせて、御前の方にむかひて立てるを」と「拝し舞踏しさわぐよ」の二つの情景・動作が基になっている。中宮に近侍し、その関係上主上近くある折、奏慶の世界を覗き見得た感動の一シーンである。

「うしろをまかせて、御前の方にむかひて立てるを」は、昇進のお礼言上に衣冠束帯姿も重々しく、下襲の裾を真直に後方に引き、直立して笏を把り（能因本・前田家事には「しやくとりて」とある）、昇進の感動を内に籠めている情態である。その内に秘めた感動の世界の中に清少納言の感情も投入し、それが溢れて「立てるを」の「を」という感動の間投助詞となって表れたのである。間投助詞「を」は相手志向型の助詞で、相手に訴える緊迫した表現（酒井憲二氏『間投助詞や・を・ゐ・よ』『国文学解釈と鑑賞』昭和四十五年十二月）である。内なるものを強く相手に訴えるものならば、前述した如く奏慶者の感動の中に傍観者である作者の感情が移入し、奏慶者の心情と合一して発した詠嘆感動の助辞である。

次に「拝し舞踏しさわぐよ」は、お礼言上が終ると、謝意を表する拝舞に入る。拾芥抄に「舞踏事、再拝置笏、立左右左、居左右左、取笏小拝、立再拝」とあるように、立って左右左、居って左右左と舞う。それも今までじっと秘めていた感動が堰を切ったかの如く「さわぐよ」といった動作になって表れる。「さわぐ」は忙しく動きまわるのである。堀川百首慶賀の俊頼の歌に「かしはぎを椎のさえだに折かけて左右左までやふしまろぶらん」のごとく裾を左右に振り流しながら、あたかも伏しまろぶように泳ぐが如く激しく舞う。この歓喜の頂点を表す激しい舞いを、がっちりと作者の心に受け止め、拝舞者の心情をそれと認識して指し示しているのが間投助詞「よ」である。「よ」は判断を確認して念を押し相手に持ちかけ、意を強く表す働きがある（前載酒井憲二氏間投助詞）からである。

以上の二つの現象そのものが「をかし」というのではない。二つのものがある時点を境目に感動を内にじっとこらえた直立不動の巌のごとき「静」の世界から歓喜の絶頂を示す激流のごとき「動」の世界へ急変していく様と、それらの「静」と「動」の対照がかもす感動が「……こそいとをかしけれ」となってくる。従って、「をかし」を面白いとか、ほほえましいと訳すのはどうであろうか。「静」の世界の感動の「を」、「動」の世界の感動の「よ」を内蔵している「をかし」は、やはり感動深い意を表すものとして採らねばならない。枕冊子の「をかし」の中には「あはれ」に近い意味を持っているのも少くないが、ここもその一例として考えられよう。ではなぜ、清少納言は「をかし」ではなく「あはれ」をずばりと使わなかったのであろうか。それは、この段が昇進お礼の晴がましく明るい奏慶の場で、そこには一片悲哀感もなかったからであろう。